

青年期における対人恐怖心性の特徴とその関連要因についての省察

鎌倉 利光 (文学部准教授)

1. はじめに

青年期に発症しやすい精神的問題の一つが対人恐怖である。対人恐怖とは、精神医学領域において著名な森田正馬が最初に用いた概念である。森田正馬が提唱して以来、対人恐怖という概念は専門家によってやや異なって用いられている。現在までに用いられている対人恐怖の概念の一例を挙げると、対人恐怖とは、「対人場面において耐え難い不安・緊張を抱くために、対人場면을恐れ・避けようとする神経症の一型」と定義されている⁽¹⁾。そして、その悩みの内容は「対人関係における戸惑い、相手の期待をはずすことへの恐れ、社交能力の自信の無さ、人前での何らかの行為の失敗の恐れ等といった対人場面での行為の遂行や、社交やコミュニケーションそのものへの不安が中心となっているケースと、注視されている赤面等恥ずかしい自分の何かが注目されている・駄目な自分を見透かされている、他者に見つめられている、迷惑がられている、嫌われている等といった強迫的思考や思い込みに苦しんでいるケースとに大別される」と定義されている⁽¹⁾。

その一方、対人恐怖に関する心理的傾向は一般青年にも広くみられることが指摘されている⁽²⁾。例えば、「自分の居場所がない」、「なかなか集団のなかに溶け込めない」、「知らない人と話がうまくできない」といった悩みをもつ青年が少なからずみられるようである。

このように、一般の青年にみられる対人恐怖の心理的傾向のことを対人恐怖心性（あるいは対人恐怖傾向）と呼ぶ⁽²⁾。近年、対人恐怖心性が高い青年が増えていると報告されており⁽³⁾、このような青年の悩みに対する対応やカウンセリングは、教育相談といった場において必要とされている。そして、青年期における対人恐怖心性の問題への対応やカウンセリングを行うために必要な実証的研究の見地として、心理学研究では、青年期の対人恐怖心性の特徴とは何か、また、その関連要因と何か、といった問いについて検討されてきた。そこで、本稿では、臨床心理学、発達心理学、パーソナリティ心理学といった分野の研究を中心に概観し、青年期における対人恐怖心性の特徴とその関連要因に関して考察していきたい。

2. 対人恐怖心性の特徴とその時代的变化

一般の青年において、集団のなかにも溶け込めない、他者の目が気になる、といった対人恐怖心性が広くみられることが指摘されているが、このような対人恐怖心性について測定するための尺度がいくつか開発されてきた。例えば、永井⁽⁴⁾は、対人恐怖心性を三つの特徴、すなわち「対人状況における問題行動」、「関係的自己意識」、「内省的自己意識」から捉えた尺度を作成した。また、堀井・小

川^(5,6)は、「自分や他人が気になる悩み」、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「目が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」、「生きていることに疲れている悩み」といった特徴から捉えた対人恐怖心性に関する尺度を作成した。

このような尺度を用いることにより、大学生の対人恐怖心性を量的に捉え、その統計量を表す平均値や標準偏差が推定されている。例えば、堀井⁽³⁾の研究では、上記の堀井・小川^(5,6)の尺度を用いることによって、1993年の調査において推定された大学生の対人恐怖心性の各特徴の平均値と、2008年の調査において推定された大学生の対人恐怖心性の各特徴の平均値を比較した。その結果、上記の尺度において対人恐怖心性の特徴である「集団に溶け込めない悩み」、「目が気になる悩み」、「生きていることに疲れている悩み」に関する平均値については、1993年の調査時よりも2008年の調査時のほうがそれぞれ男女共に有意に高くなった。この結果から、大学生の対人恐怖心性は時代的推移と共に高まっている可能性が考えられる。

この研究に関連して、筆者は、2010年の12月から2011年の1月にかけて、A大学に在籍する大学生173名（男性85名、女性88名）を対象とし、堀井・小川^(5,6)が作成した尺度により対人恐怖心性を測定した。なお、堀井⁽³⁾の研究の同様に、6件法による自己評価式尺度を使用した。また、調査結果を分析する際に、堀井⁽³⁾の研究結果と比較するために、対人恐怖心性の各項目の評価基準値に関して、「全くあてはまらない」については0、

「あてはまらない」は1、「あまりあてはまらない」は2、そして、最後の「ぴったりあてはまる」については6、とそれぞれ順に変換し、数量化した。

次に、筆者の分析により得られた主な結果について列挙する。上記の尺度の一つの特徴である「自分や他人が気になる悩み」に関する平均値に関して、男性では15.00（標準偏差6.11）、女性では16.26（標準偏差6.11）を示した。そこで、この結果と堀井⁽³⁾の研究結果を比較したところ、筆者の調査の分析から得られた「自分や他人が気になる悩み」に関する平均値は、堀井⁽³⁾の研究で報告された「自分や他人が気になる悩み」に関する平均値よりも男女共に高い値を示した。

続いて、筆者の調査結果として、「集団に溶け込めない悩み」に関する平均値は、男性で13.48（標準偏差7.72）、女性で14.19（標準偏差6.95）を示した。そして、この結果と堀井⁽³⁾の研究結果を比較したところ、女性の場合、筆者の調査結果として、「集団に溶け込めない悩み」に関する平均値は、堀井⁽³⁾の研究で報告された1993年と2008年における「集団に溶け込めない悩み」に関する平均値よりも高い値を示した。

また、筆者の調査結果として、「社会的場面で当惑する悩み」に関する平均値は、男性で13.42（標準偏差7.91）、女性で16.56（標準偏差6.67）を示した。特に、女性における「社会的場面で当惑する悩み」に関する平均値は、堀井⁽³⁾の研究で報告された1993年と2008年の「社会的場面で当惑する悩み」に関する平均値よりも高い値を示した。最後に、筆者の

調査結果として、「目が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」、「生きていることに疲れている悩み」に関する平均値については、堀井⁽³⁾の研究で報告された「目が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」、「生きていることに疲れている悩み」に関する平均値と同程度か、あるいは低い値を示した。

以上の結果から、特に「自分や他人が気になる悩み」については、男女共に時代的推移の変化に従って高まっている傾向があると考えられる。しかし、筆者の調査結果に関しては、一つの大学に在籍する学生を対象として得られた結果である点について留意する必要がある。また、本稿では、筆者の調査結果と堀井⁽³⁾の研究結果との比較を試みたが、その比較は統計学的検定に基づいて行われていない、という問題が挙げられよう。したがって、対人恐怖心性のいくつかの特徴が時代的推移につれて高まっている、という結論に至ることはまだ早計であるかもしれない。しかし、上記の研究の限界を踏まえつつも、自分が他者からどう見られているのかについて不安になる、自分が相手に嫌な感じを与えていると思う、といった自分や他人が気になる心性を強く感じている大学生が時代の変化と共に増えている可能性は否定できないと考えられる。

その一方、対人恐怖心性の特徴は、時代の変化と共に質的に変化していることが指摘されている。例えば、岡田^(7,8)や山田⁽⁹⁾は、わが国の青年の一特徴として、ふれあい恐怖症（例えば、顔見知りからより親密になる、といったようなふれあいの場で生じる対人恐

怖等）と呼ばれる現象がみられることを示唆している。また、堀井⁽⁹⁾は、近年において、被害感や迫害感をもち、対人関係におびえた大学生が増えていると論じている。このような背景を踏まえ、堀井⁽⁹⁾は、対人関係に対するおびえの心性に基づく尺度を開発し、おびえの心性を表す「劣等恐怖」、「被害恐怖」、「自己視線・醜形恐怖」、「孤立・親密恐怖」、「加害恐怖」といった因子を抽出した。ただし、対人恐怖心性が時代の流れと共に質的に変化している可能性は高いけれども、時代の変化と共になぜ対人恐怖心性が質的に変化しているのか、また、ふれあい恐怖症やおびえの心性が高い青年に対して、どのような対応やカウンセリングが必要であるのか、といった問いについて明確ではないように思われる。この問いについて検討するためには、ある特定の出来事を共有している青年を対象とした縦断的調査やコホート分析を実施することが必要とされよう。

3. 対人恐怖心性の関連要因

上述のように、ふれあい恐怖症等を含めた対人恐怖心性が高い青年が増えていると考えられるけれども、対人恐怖心性の高低には個人差があることも踏まえておく必要がある。そこで、対人恐怖心性の高低を含めた個人差が生じさせる要因とは何か、すなわち対人恐怖心性に関連する重要な要因とは何か、いった問いに関して検討されてきた。そこで、本論文では、はじめに対人恐怖心性と恐怖、不安感、抑うつ傾向といった精神的健康の問題に関する要因との関連性について概説する。

次に、対人恐怖心性の関連要因として、自己愛、自己評価や自尊感情といった自己に関連する特性、続いて、友人関係や家族関係について取り上げ、それぞれ考察していきたい。

(1) 対人恐怖心性と恐怖、不安感、抑うつ傾向

対人恐怖心性と恐怖、不安感との関連性に関する研究として、例えば、堀井⁽¹⁰⁾の報告では、「劣等恐怖」、「被害恐怖」、「自己視線・醜形恐怖」、「孤立・親密恐怖」、「加害恐怖」といった対人恐怖心性を表す諸特徴と恐怖や不安感情との間に有意な正の相関がそれぞれみられた。つまり、対人恐怖心性が高い大学生ほど、日常的に感じる恐怖感や不安を抱く傾向が強いことが示唆されている。

次に、対人恐怖心性と抑うつ傾向との関連性について検討した研究を取り上げる。高校生を調査対象とし、質問紙法を用いて自己関係づけ、対人恐怖心性、抑うつ傾向、登校回避感情等との関連性について検討した研究⁽¹¹⁾では、対人恐怖心性と抑うつ傾向との間に有意な正の相関がみられることが明らかにした。ただし、この研究で用いられた抑うつ傾向に関する尺度の妥当性の問題について取り上げており、結果の解釈については留意することが必要である。また、伊藤ら⁽¹²⁾は、大学生を調査対象とした質問紙調査を用いて、ふれあい恐怖心性や対人恐怖心性と抑うつ傾向、自我同一性との関連性について検討した。その結果、対人恐怖心性が高い群は、ふれあい恐怖心性が高い群や退却・恐怖が低い群よりも抑うつ傾向が有意に高いことが明

らかにされた。ただし、対人恐怖心性が高いことが抑うつといった心理的適応上の問題と直接に結びつくとはいいきれない。また、質問紙調査を用いた研究では、対人恐怖心性と抑うつ傾向が密接に関連していることが明らかにされていることから、対人恐怖心性が高い青年に対する学校教育相談を含めたカウンセリングが必要とされる場合が考えられる。

(2) 対人恐怖心性と自己愛、自尊感情、自己意識

青年期における発達課題とは、自分自身のアイデンティティ（自我同一性）の確立であり、それは本来のあるべき姿とは何か、といった問いについて考え、自己を見つめる時期である⁽¹³⁾。そして、自己に関連する特性、すなわち、自己愛的評価、自尊感情や自己意識といった個人的特性のあり方が青年の人格形成に関与している。また、青年期における自己愛、自尊感情や自己意識のあり方が対人恐怖心性の高低に関係していることが明らかにされている。そこで、主に青年期を対象とした質問紙調査を用いて、対人恐怖心性と自己愛、自尊感情（自己評価を含む）、自己意識との関係について検討した研究に関して、次に概説していきたい。

① 対人恐怖心性と自己愛

対人恐怖が生じる背景として自己愛の強さが挙げられる。他者から自分がどのように見られているのか、といった自分のことに対する意識の高揚が自己愛に関係し、それが対人恐怖に結びつくという見解である。ただし、

ここで想定されている対人恐怖とは対人恐怖心性とは異なり、精神医学に関する診断症状を含めた場合を示していることに関して留意する必要がある。その一方、上述の背景を踏まえ、一般の大学生を対象とした調査研究によって、対人恐怖傾向、あるいは対人恐怖心性と自己愛傾向との関連性について検討されている。

上地・宮下⁽¹⁴⁾は、大学生を調査対象とした質問紙法により、過敏、脆弱な自己愛傾向の側面とされる自己顕示抑制、承認・賞賛過敏性、潜在的特権意識が対人恐怖傾向に有意に関与していることを明らかにした。このことから、過敏型の自己愛が強い、あるいは脆弱な自己愛傾向がみられる青年は他者に承認・賞賛や特別な配慮を求める傾向があり、そして、期待した反応が返ってこないときには心理的に不安定になりやすく、対人恐怖傾向が高くなりやすいと考えられる。

その一方、相澤⁽¹⁵⁾は、これまでの対人恐怖に関するいくつかの臨床研究を参考にし、対人恐怖と過剰警戒型の自己愛との関係について検討した。その結果、対人恐怖と過剰警戒型の自己愛との間には一定程度の差異があることから、対人恐怖と過剰警戒型の自己愛の類似性により、対人恐怖を自己愛的であるとみなすことに関して注意することが必要であると考察した。そして、対人恐怖と過剰警戒型の自己愛との間には、共通している部分と独立している部分があると考えることが妥当であることを示唆した。

次に、対人恐怖と自己愛をそれぞれ独立した次元として捉えた研究について概説する。

清水・岡村⁽¹⁶⁾は、大学生を調査対象とした質問紙法を用いて、対人恐怖心性と自己愛傾向をそれぞれ独立した次元として捉え、これらの次元間の組み合わせにより、いくつかの群に分類した。その群の一つである誇大-過敏特性両性型とは、対人恐怖心性と自己愛傾向の双方が高いタイプであり、このタイプは脆弱な現実自己を隠すための完全主義・強迫性と不安定な自己観を有することを明らかにした。そして、このタイプは、森田神経質をもつ対人恐怖の状態、すなわち、上記の上地らの研究⁽¹⁴⁾において報告された過敏型の自己愛が強い、あるいは自己愛的に脆弱である状態であると論じた。さらに、この他のタイプとして、例えば、対人恐怖心性が高く、自己愛傾向が低い過敏特性優位群の場合、完全性の追求が希薄であり、失敗の恐れや否定的な自己観を有し、そして社会恐怖の診断基準に類似した状態であると推察した。ただし、この研究の調査対象は、一般の大学生を対象とした研究であることから、実際の臨床やカウンセリング場面における用途に関して留意する必要があると考えられる。

② 対人恐怖心性と自尊感情（自己評価を含む）

岡田・永井⁽¹⁷⁾は、中学生、高校生、大学生を調査対象とした質問紙法を用いて、対人恐怖心性と自己評価との関連性について検討した。その分析の結果、中学生と大学生においては、対人恐怖心性と自己評価との間に負の相関がみられることが明らかにされた一方で、高校生においては対人恐怖心性と自己評

価との間に相関がほとんどみられないことを示した。

上地・宮下⁽¹⁴⁾は、大学生を調査対象とした質問紙法を用いて、対人恐怖傾向と自己愛的脆弱性、自己不一致、自尊感情との関連性について検討した。主な分析の結果の一つとして、対人恐怖傾向と自尊感情との間において、強い負の相関がみられることを明らかにした。また、鎌倉⁽¹⁸⁾は、大学生を対象とした短期縦断的調査による質問紙法を用いて対人恐怖心性と自尊感情、文化的自己観との関連性について検討した。重回帰分析におけるステップワイズ法を用いて分析した結果、対人恐怖心性の一つの特徴である「自分や他人が気になる悩み」に対して、自尊感情と、文化的自己観の特徴とされる相互独立性、相互協調性が時系列的にそれぞれ有意に寄与していた。そして、その寄与を表す回帰係数は自尊感情において-0.22、相互独立性において-0.17、相互協調性において0.35を示しており、このことから、自尊感情と相互独立性が低く、そして相互協調性が高いほど「自分や他人が気になる悩み」が高い傾向にあることを示唆した。また、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「目が気になる悩み」等といった対人恐怖心性の諸特徴に対して、自尊感情が時系列的に有意に負の影響を与えていることを明らかにした。

以上の研究を総括すると、中学生や大学生においては、対人恐怖心性と自己評価、自尊感情との間には有意な負の相関がみられる一方、高校生においては両者の相関が低い可能性が高いと考えられる。

③ 対人恐怖心性と自己意識

堀井⁽¹⁹⁾は、高校生、大学生を調査対象とした質問紙法により、対人恐怖心性と公的自己意識、私的自己意識との関連性について検討した。主な分析の結果として、大学生は、男女共に対人恐怖心性と公的自己意識との間に有意な正の相関がみられた一方、高校生においては対人恐怖心性と公的自己意識との間には弱い正の相関がみられた。また、高校生においては、男女共に対人恐怖心性の一部の特徴（自分や他人が気になる）と私的自己意識との間にも有意な正の相関が見出された。以上の結果は、公的自己意識の特徴である見られる自分の意識が対人恐怖心性に強く関与することを示唆していると考えられる。

清水⁽²⁰⁾は、対人恐怖心性と自己関係づけの2つの次元に基づき、クラスター分析を用いて4つの群に調査対象の青年を分類し、各群の特徴について分析した。その結果、例えば、対人不安意識、自己関係づけが低い群は、対人不安意識や他者行動に対する被害的認知が低い一方、対人不安意識、自己関係づけが高い群は、他者観点からの感度が強いために対人不安意識や他者行動に対する被害的認知が強く、自己の安定性が低いことを明らかにした。

以上の研究から、青年期になると、公的自己意識が高まること、すなわち、見られている自分を意識するようになると言われているが、自己意識が過剰である青年ほど対人不安や対人恐怖心性を抱きやすいことが推察される。

(3) 対人恐怖心性と友人関係、親子関係

上記のように、青年期における自己愛や自尊感情、自己意識といった自己に関する特性と対人恐怖心性との関連性について検討されているが、青年の対人恐怖心性に対して自己に関する特性だけが主要な関連要因であるわけではない。青年の対人恐怖心性に関連する要因として、友人関係や親子関係がかかわっていることも明らかにされている。例えば、2節で取り上げた対人恐怖心性の新たなタイプとされるふれ合い恐怖心性と友人関係との関連性について検討されている⁽⁸⁾。その分析の結果、ふれ合い恐怖尺度の対人退却尺度得点だけが全体の平均より高い大学生の群は、心理的に近い他者との関係に対して不安を示した。また、対人退却尺度得点を除くふれ合い恐怖尺度得点が高い群は、表面的で円滑な友人関係を形成する傾向があることを明らかにした。また、大学生の対人恐怖心性と両親の養育態度に対する認知との関連性について検討されている⁽²¹⁾。その結果、親（特に母親）が過干渉であったと感じている大学生の対人恐怖心性は、過干渉であったと感じていない大学生の対人恐怖心性よりも有意に高いことが報告されている。

多くの心理学研究では、青年期的人格形成に対して友人関係や親子関係が重要な要因であることが報告されてきたが、同様に大学生の対人恐怖心性の高低に関しても友人関係や親子関係が有意に関連していると考えられる。ただし、これまでの研究だけでは、対人恐怖心性と友人関係や親子関係との詳細な関連性については明らかではない。例えば、対

人恐怖心性が高い青年ほど、友人との関係に対して不安を抱きやすいのか、あるいは、友人との関係に対して不安を抱きやすい青年ほど対人恐怖心性が高いのか、といった問題について検討の余地が残されていると考えられる。

4. おわりに

本稿では、青年期における対人恐怖心性の特徴とその関連要因について省察した。これまでの対人恐怖心性に関する心理学研究では、対人恐怖心性の概念化と共にその特徴を捉え、測定するための尺度が開発されてきた。そして、対人恐怖心性に関する尺度を用いた質問紙調査により、青年期の対人恐怖心性の特徴とその関連要因について検討されてきた。

対人恐怖心性の特徴として、例えば、自分や他人が気になる、集団に溶け込めない、といった悩みが挙げられるが、時代の推移に従い、上記のような特徴が量的に増加している傾向が伺える。そこで、本稿において筆者が実施した対人恐怖心性尺度を用いた調査の結果について概説したが、この調査結果と先行研究を比較すると、やはり現代の大学生は、1990年代の大学生よりも対人恐怖心性が高くなっていることが推察される。しかし、この現代の大学生の対人恐怖心性が今から20年前の大学生の対人恐怖心性よりも高いことの原因については明確ではない、といった問題が挙げられる。この問題に関して検討するためには、対人恐怖心性尺度だけでなく、その関連要因についても測定する尺度を含めたコホ

ート分析が必要とされよう。

また、青年期の対人恐怖心性の特徴は時代の変化と共に質的に変化している、という見解が示唆されている。例えば、顔見知りからより親密になるようなふれあいの場で生じる対人恐怖や、対人関係に対するおびえの心性といった新たな対人恐怖心性のタイプがみられると報告されている。このような対人恐怖心性の質的な変化に対して着目しつつ、現代において対人恐怖心性が高い青年に対する教育相談や学生相談のあり方について検討することが重要であると考えられる。

一方、対人恐怖心性の関連要因として、本稿では、精神的健康の問題や自己にかかわる特性、友人関係や親子関係を中心に省察してきた。論述してきたように、青年期における対人恐怖心性と抑うつや不安のような精神的健康の問題は密接な関係にあることから、対人恐怖心性が高い青年に対する対応やカウンセリングのあり方について注意を要するだろう。また、青年期における自己評価や自尊感情の低さや公的自己意識の高さは、対人恐怖心性の高さと有意に関連していることが明らかにされている。そして、友人関係に対して不安を抱いている青年や、母親が過干渉であったと感じている大学生の対人恐怖心性は、過干渉であったと感じていない大学生の対人恐怖心性よりも有意に高いことが明らかにされている。

しかし、上述のような自尊感情といった自己にかかわる特性や友人関係、親子関係がどのように対人恐怖心性に関連しているのか、といった問いについて十分に検討されている

とは言えない。例えば、過去における自尊感情の低さがその後の対人恐怖心性の高さに寄与しているのか、これとは対照的に、過去における対人恐怖心性の高さがその後の自尊感情の低さに寄与しているのか、といった時系列的な関連性について十分に検討されていない。実際、これまでの対人恐怖心性の関連要因に関する研究を概観すると、縦断的調査を用いた研究はほとんど行われていないことを踏まえると、上記の問題について検討するためには、少なくとも縦断的調査を視野に入れた研究が必要とされよう。つまり、縦断的研究を用いることにより、対人恐怖心性が高い青年は、時間的な推移と共に、その後どのような問題を生じやすいのか、といった問題について検討していく必要があるといえよう。そして、このような問題について明らかにすることは、対人恐怖心性が高い青年への教育相談や学生相談のあり方を検討する際の有用な知見となり得るのではないと思われる。ただし、対人恐怖心性が高い青年の多くは、特別な心理的な問題を有しているわけではないことについて留意する必要があるだろう。また、見方を変えると、対人恐怖心性が高いこと自体、日本人の青年の心理的な一つの特徴として捉えることもできるだろう。以上のことを踏まえ、対人恐怖心性の特徴とその関連要因について今後も実証的に検討されること、そして、本稿の青年期の対人恐怖心性に関する諸研究の省察が様々な教育相談や学生相談の場において有効的に活用されることを期待したい。

引用文献

- (1) 鍋田恭孝 (2011). 対人恐怖. 加藤敏・神庭重信・中谷陽二・武田雅俊・鹿島晴雄・狩野力八郎・市川宏伸 (編) 現代精神医学事典 弘文堂. p. 669.
- (2) 永井徹 (1994). 対人恐怖の心理 サイエンス社
- (3) 堀井敏章 (2011). 大学生における対人恐怖心性の時代的推移 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 教育科学, 13, 149-156.
- (4) 永井徹 (1991). 対人恐怖の心性の構造について—対人恐怖の心性の質問紙の作成 聖セシリア女子短期大学紀要, 16, 50-55.
- (5) 堀井敏章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- (6) 堀井敏章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- (7) 岡田努 (1993). 現代の大学生における“内省および友人関係のあり方”と”対人恐怖心性”との関係 発達心理学研究, 21, 162-170.
- (8) 岡田努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖の心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10 (2), 69-84.
- (9) 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 (1987). 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報)—ふれ合い恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究— 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23 (2), 206-215.
- (10) 堀井敏章 (2006). 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発 対人関係におけるおびえの心性を測定する試み 学生相談研究, 26, 221-232.
- (11) 金子一史・本城秀次・高村咲子 (2003). 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連 パーソナリティ研究, 12 (1), 2-13.
- (12) 伊藤亮・村瀬聡美・吉住隆弘・村上隆 (2008). 現代青年における“ふれ合い恐怖心性”と抑うつおよび自我同一性との関連 パーソナリティ研究, 16 (3), 396-405.
- (13) 鎌倉利光 (2011). 青年・成人の世界 pp. 123-134. 河野義章 (編) 心理学Ⅰ・その理論と方法 川島書店
- (14) 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17 (3), 280-291.
- (15) 相澤直樹 (2009). 対人恐怖と自己愛との関係に関する再整理の試み 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2 (2), 1-10.
- (16) 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討— 対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究, 58, 23-33.
- (17) 岡田努・永井徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, 60 (6), 386-389.
- (18) 鎌倉利光 (2012). 対人恐怖心性と自尊感情、文化的自己観の関連—大学生を対象とした短期縦断的調査による検討— 日本心理臨床学会第31回大会論文集, 378.
- (19) 堀井敏章 (2001). 青年期における自己意識と対人恐怖心性との関連性 山形大学紀要, 教育科学, 12 (4), 453-468.
- (20) 清水健司 (2009). 青年期における対人恐怖心性と自己関係づけの関連 信州大学人文科学論集 人間情報学科編, 43, 65-75.
- (21) 山崎久美子・吉野真紀・木下利彦・小野純平 (2012). 大学生における対人恐怖の心性, ふれあい恐怖の心性と両親の養育態度について 心理臨床学研究, 29 (6), 673-682.

